# 大妻学院における手芸教育の研究2

A study of Handicraft education at Otsuma Gakuin 2

卜部 夏菜子
Kanako Urabe

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード：手芸，家庭化教育，大妻学院
Key words：Handicrafts, Home economics education, Otsuma Gakuin

## １．研究目的

明治 41 年開学の大妻学院では裁縫・手芸を主とした教育が行われていた．大妻女子大学博物館には大妻学院の教育に関する資料が多数所蔵されているが，卒業生から寄贈された昭和時代前期の資料の多くは，詳細な調査が行われていない．

本研究では大妻学院における昭和時代前期の課程に関する記録，同窓会誌の内容，大妻女子大学博物館の所蔵品から，戦前の大妻学院で行われていた手芸教育の内容および社会への影響を明らかにし，当時の手芸の時代的特徴を捉えることを目的とする．

## ２．研究実施内容

大妻学院の沿革および教育内容については『設立十周年記念 大妻學校の過去と現在』（大正 15 年），『大妻学院八十年史』（平成元年）を用いて調査した．

上記の資料によると，大妻学院は明治 41 年，大妻コタカが近所の女性たちに手芸を指導する私塾として始まった．大正 4 年度に開催された生徒作品展覧会や講習会での評判から，大正 5 年に各種学校として認可された．当時の学科課程を見ると，裁縫よりも手芸に関する学科が多く，技法ごとに教授内容のレベルや教授量，修業期間の異なる学科が設置されていた．認可時の規則によると，当時は主に他の学校や家事の合間などに勉強しに来る女性に向けた学校であった．その後，生徒数の増加やそれに伴う卒業生の進路確立のため，学校組織，学科編成や教授内容は頻繁に変化していた．

大妻学院では非常に多くの学科やコースが設置されており，開講時間，修業期間，教授内容の難易度，到達目標などを基準に分けられていた．教授量や難易度は学科によって異なるが，手芸科目では主に「刺繍，造花，編物，袋物，摘細工」の 5 技法が教授されていた[1]．また手芸に関する学科は次第に少なくなっており，修業期間もより短くなっていった．

次に，大妻学院が発行していた同窓会誌『白ゆり』（大正 10～昭和 19 年）24 冊，『ふるさと』（昭和 8～昭和 14 年）23 冊を用いて当時の学校生活の様子と卒業研究題目などの学事記録を読み取った．

在校生向け同窓会誌『白ゆり』には，学生が寄稿した学校生活・行事の様子，家族や親戚，友人へ向けた手紙のほか，学生，教員名簿などが掲載されている．手芸に関する内容としては，毎年 10 月に行われていた展覧会・バザーの記録が挙げられる（図 1）．展覧会では実演を交えた展示を行い，学内外に日々の学習成果を発表していた．同誌には代表学生による各展示への感想と写真が掲載されており，特に手芸作品は展示数が多かったことが掲載記事から読み取れた．また，手芸作品に対して「大妻學校否刺繍界の粹と云つても云ひつくせまい．」（第 13 巻，昭和 6 年），「いづれもが驚歎の眼を見はつて居りました．」（第 25 巻，昭和 10 年），「飾りつけが美しくどなたが見てもやつて見たくなる」（第 31 巻，昭和 13 年）などの記載があり，これらは高く評価されていたことがわかる．

[1] 大正 5～15 年ごろの大妻学院（大妻技芸学校）の教育内容より抜粋　大妻学校同窓会 編 『設立十周年記念 大妻學校の過去と現在』大妻学院，大正 15 年

図 1．展覧会での手芸作品（『白ゆり』第 31 巻，昭和 13 年）

卒業生向けの『ふるさと』には，教員などによる現在の学校生活の様子，卒業生の近況報告のほか，卒業生に向けた宣伝として入学案内や講習会のお知らせが掲載されていた．開学初期から長期休業時に行われた講習会では，主に手芸の様々な技法が個人教授されていた．第 8 巻第 5 輯（昭和 9 年）からは「遠くは布哇（ハワイ）南支那から受講會員が集り總員七百七名に及」ぶほど，国内外から多くの女性が集まっていたことが明らかになった．

同誌には卒業論文の題目や，学生による研究論文も掲載されていた．例えば，昭和 10 年に発刊された第 9 巻第 3 號には，卒業論文題目として「刺繍より見たる紋章の時代的考察」，「手芸教育より見たる編物の研究」などが挙げられていた．これらの研究は，無試験で手芸に関する中等教員免許を取得することができた，大妻技芸学校高等技芸科の学生によるものであった．こうした学科では技法指導だけでなく，高度な研究活動も行なわれていたことが明らかとなった．

これらの内容を踏まえたうえで，学科名や教育課程の文面からではわからない，大妻学院における裁縫・手芸教育の詳細な内容やその特徴を明らかにするため，大妻女子大学博物館に所蔵されている 240 点の卒業生寄贈品の調査，分析を行った．

氏名がわかる寄贈者は 15 名であった．寄贈者は昭和 10～20 年ごろに在籍していた者が多く，半数が無試験で教員免許を取得することができた学科を卒業していた．調査資料のうち，手芸技法を用いた制作品は 48 点と比較的少なかった．これは修業期間が 1 年で和裁を中心に学ぶ，大妻技芸学校裁縫高等科などの卒業生が多かったためであると考えられる．

今回調査した手芸制作品は，作品の特徴から手芸作品として完成しており，すぐに使用可能な「作品」と（図 2），作品制作や装飾に用いるために，各技法の基礎となるものを練習した「見本」と呼ばれるものの 2 つに分類することができる（図 3）．

図 2．手芸作品の例　かぎ針編みベスト（雛形）

図 3．手芸見本の例　棒針編み見本

これらを使用された技法ごとにまとめたところ，作品として完成しているものは少なく，各技法の見本が多くを占めた（表 1）．

表 1．大妻女子大学博物館所蔵の手芸制作品の分類内訳

| 技法 | 作品数 | 見本数 | 点数 |
|---|---|---|---|
| 刺繍 | 6 | 7 | 13 |
| 編物 | 3 | 5 | 8 |
| レース | 2 | 5 | 7 |
| ドロンワーク | 3 | 3 | 6 |
| スモッキング | 0 | 5 | 5 |
| 染色 | 1 | 2 | 3 |
| 袋物 | 2 | 0 | 2 |
| その他 | 2 | 2 | 4 |
| 合計 | 19 | 29 | 48 |

「作品」においては装飾性や芸術性の高いものは少なく，袋物，刺繍の施されたクッション，着物の帯・かけ衿や，編物のベスト，靴下などといった実用的なものが見られ，刺繍，編物などの各技法は装飾に使用されていた（図 4）．また，多数の作品から使用感が見られたことから，大妻学院では学んだ内容をすぐに活かすことができる，実用的な手芸技法の指導に力を入れていたと考えられる．

図 4．刺繍が施された帯

このことは所蔵作品の中で見本作品が多かった点からも言うことができる．刺繍，編物，レースなど装飾に使用される技法を練習した見本が多く見られ，各技法は複数種指導されていた．教授される技法の種類や数は学科のレベルによって異なり，裁縫高等科卒業生と高等技芸科卒業生では，教授された技法の難易度，制作点数，作品の完成度に大きな差が見られた．寄贈者の多くは，教員として必要な技術を短期間で身に着けることが求められた．そのため，見本を用いた効率的な指導方法が行われていたと考えられる．また，学校教育での手芸は，生活で使用できる実用的なものが求められるため，使いやすい作品や技法を指導する必要性があったとみられる．

博物館所蔵資料調査から，大妻学院では学んだことを無駄にせず，すぐに生かすことができる実用的な内容が多く指導されていたということができる．大妻学院で学んだ実用的な裁縫，手芸技術を日常生活や教育の場，展覧会，バザーなどで紹介することで評判を高め，新たな学生を呼び込んでいたとみられる．

以上，これらの研究結果を修士論文「昭和時代前期の大妻学院における裁縫・手芸教育について－同窓会誌，博物館所蔵品をもとに－」としてまとめた．

## 3．まとめと今後の課題

大妻学院の沿革と教育の特徴調査からは，さまざまな立場に置かれた学びたい女性のために，非常に多くの学科やコースを設置していたことが明らかになった．学科編成や教授内容は時勢や学生の要望に応じて頻繁に変更されていた．

大妻学院の同窓会誌内容調査では，日々の学習の成果が展覧会やバザーで公開され，学外から高い評価を得ていたことが読み取れた．講習会には国内外から多くの受講者が集まっていたことからも，社会に大きな影響力を持っていたと考える．また，研究論文等の掲載から，大妻学院では研究者養成などの高度な教育も行なわれていたことが示された．

大妻女子大学博物館に寄贈された卒業生の手芸制作品は，各技法を装飾に用いた実用的なものが多く，見本を用いた効率的な教授が行われていたことが資料調査から明らかになった．

これら大妻コタカが指導した，使いやすい手芸作品や技法の数々は，雑誌やラジオ講座など多くのメディアで取り上げられており，当時の手芸界では画期的なものであったと考えられる．今後は昭和時代における一般的な手芸の技法や社会的受容に関して雑誌等から調査し，大妻コタカによる手芸教育の特徴と比較していく．